特集

大町町制90周年

未来へつなぐ町民の声

町で暮らしてきた方に、当時の思い出や
変わっていく町の様子について話を伺いました。



～民生委員・土井政子さんが見つめてきた、大町の福祉のいまむかし～



土井 政子 さん(94歳) 寺口区

民生委員(民生委員歴20年)
大町町ボランティア連絡協議会　会長
大町町社会福祉協議会　副会長





「昔はなんでも民生委員がやらなければいけない時代だった」と振り返る土井さん。区長の推薦をきっかけに民生委員となり、20年の長きにわたり地域住民の暮らしに寄り添い続けてきました。

当時は現在のような地域包括支援センターやデイサービスもなく、まさに「ゆりかごから墓場まで」。近所の赤ちゃんのお世話をはじめ、夜中に身寄りがない人のために医師を呼んだり、行政やお寺と協力して葬儀の手配まで行ったりと、地域で困っている人の一番近くで奔走してきました。

炭鉱時代は人とのふれあいや近所つき合いが濃く、当時はまちが活気に満ちていました。時代の変化とともに近所付き合いが少し薄らいできたと感じる今だからこそ、「隣近所とのおつき合いを上手くできるよう、顔合わせをしてほしい」と地域のつながりを願います。

「これからの若い人たちがもっとイキイキと暮らせる、明るいまちになってほしい」と話される土井さん。

長年地域を見守ってきたあたたかい想いは、これからの大町町の未来へと受け継がれています。

大町の農業『いま・むかし・これから』
～手作業の時代から現代へ。変わりゆく風景と変わらぬ想い・森 勇さん～

「昔の大町は炭鉱の町。学校のお弁当も、炭鉱の家は卵焼きやソーセージが入っているのに、農家の家は漬物だけだったよ」と懐かしそうに振り返る森さん。

10代で一から農業の世界へ飛び込み、当時は朝3時から手作業で田植えする日々。土地改良や機械化が進み作業は楽になりましたが、時代とともに気候変動や後継者不足など新たな壁にも直面してきました。それでも切り拓いてこられたのは、丁寧な仕事へのこだわりがあるからこそ。「仕事を雑にしない。二度手間にならないよう丁寧に向き合うこと」。その姿勢が大町の豊かな恵みを支えています。

大町の農業の魅力を尋ねると、「顔見知りで遠慮なしに話せて、お互い励まし合えるところ」と即答。昔は田植えが終わると『さなぼり』で仲間と旅行に行き、苦労を分かち合っていました。

そんな森さんが今、若い世代に伝えたいのは施設園芸などの可能性です。「しっかり頑張れば、きちんと報われる魅力が農業にはある。若い人たちがこの町で農業に挑戦し、残ってくれたら嬉しいね」と期待を込めます。

「一日の作業を終えて、その日に酒を一杯飲むときが一番うれしい」と笑う森さん。作物の恵と農家の努力に思いを馳せながら、地元の味を大切に味わいたいものです。



森　勇 さん(81歳) 下大町区

農家（農家歴65年）
元生産組合長
元農事組合法人下大町代表

